

尾瀬と会津沼田街道

尾瀬は、現在の福島県と群馬県の県境をまたぐ交易・交通路であった会津沼田街道の間点に位置します。尾瀬の湿原、湖、山々は、20 世紀半ば、影響力のある文化人たちの芸術作品、著作、そして活動の直接的な結果として、近代になってその自然の美しさと生態学的重要性で広く知られるようになりました。

水力発電のための自然資源の利用や、福島と群馬を結ぶ舗装幹線道路建設の提案は、開発に反対する市民主導の運動を促しました。今日、尾瀬という名前は日本において環境保護の代名詞となっています。この土地は 1934 年に日光国立公園の一部に指定され、2007 年には尾瀬国立公園として独立した存在となりました。尾瀬沼と尾瀬の湿原はラムサール条約のもと、渡り鳥の重要な生息地として認識されています。

歴史に彩られた道

会津沼田街道は檜枝岐村（福島県、会津地方）と片品村（群馬県、沼田地方）を結ぶ古道です。江戸時代（1603-1867）には、両側の住民が尾瀬沼の岸にある三平下に集まり、米、酒、塩、油などの商品の売買や交換を行っていました。彼らはまた、この街道を使って狩猟、漁業、伐採の場所にアクセスしていました。これらは地域の生活を支える中核産業でした。

戊辰戦争（1868-1869）の際、徳川幕府に忠誠を誓う武士たちは大江湿原に防御的な土塁を築きました。この街道は、将軍による政治支配を終わらせ、天皇の統治権を回復させたこの内戦の重要な最終段階で重要な役割を果たしました。土塁の一つは今も湿原に残っています。幕府に忠誠を誓う会津連合軍と天皇に忠誠を誓う新政府軍双方の偵察隊が、三平峠と尾瀬沼を巡回し、時に小さな小競り合いを起こしました。

近代観光と環境意識の高まり

画家の大下藤次郎（1870-1911）、野外活動家の平野長蔵（1870-1930）、植物

学者の武田久吉（1883-1972）は、それぞれの文化圏で尾瀬の知名度を上げました。武田と平野、そして平野の息子と孫は、20世紀の主要な開発プロジェクトから尾瀬を守ることに成功しました。

しかし、20世紀半ばに観光過剰となり、ゴミが増え、もともと影響を受けやすい環境の破壊へとつながりました。そのため、湿地帯に木製の遊歩道を作り、自家用車の乗り入れを制限するなどの保護対策がとられました。1972年には、政府組織と非政府組織の連合が尾瀬で「ゴミ持ち帰り」キャンペーンを先駆的に実施し、地域から1,400以上のゴミ箱が撤去されました。このキャンペーンは、日本全国の国立公園で同様の取り組みに刺激を与えたことで広く評価されています。